

「馬車軌道について」

泡瀬誌（昭和63年発行）より

沖縄人車軌道株式会社（大正三年：1914年3月那覇東町で設立）

上記の会社は、沖台拓殖株式会社が当初、西原工場への甘蔗（さとうきび）の搬入を拓げる目的で敷設した軌道を、さらに泡瀬までの貨客輸送を見込んで設立した軌道会社である。

泡瀬の県道南入口が終点（駅舎のようなものはなかった）になっており、すぐ近くにきゅう舎と営業所（民家）があった。

軌道の開通で、その付近はしだいに人家が増え、そば屋、たばこ屋、散髪屋、料亭なども立ち並び、通称「キドウ又前（メー）」と呼ばれるようになっていく。

当時の子供たちは、首里那覇に出かける機会は殆どなかった。電車や汽車を見たことがないので、東方（アガリバー）の子供たちはよく2～3人揃って、軌道を見に出かけた。

＜軌道の盛衰＞

中頭東海岸の主要な交通機関として登場した馬車軌道は、泡瀬・与那原間に乗合バス（昭和5年）が乗り入れられると、スピードの違うバスに乗客を奪われ、交通の主役を明け渡す運命となった。その後、昭和12～13年頃になると、安田や宮城での激しい乗合バスとの競争が生じ、東海岸の幹線から次第に姿を消していった。



『写真集ふるさと泡瀬』(泡瀬復興期成会)イラストを改変作成



馬車軌道客車のスケッチ(『写真集ふるさと泡瀬』より)